

研究課題	多様性を認め合い、それを力にダイバーシティ教育の推進
副題	～多様性文化の相互理解で推進することで学校を活性化する～
キーワード	ダイバーシティ インクルーシブ 日本語教育 メタバース
学校/団体名	公立愛川町立愛川東中学校
所在地	〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 1400
ホームページ	http://www.aikawa-edu.jp/sch/aikawahigashi-jhs/

1. 研究の背景

本校が位置する愛川町は、神奈川県にある人口約 4 万人の地方都市で工業団地とともに発展してきた。その雇用のため中南米と東南アジア系の外国人世帯が多数ある。工業団地の近隣の小中学校は外国籍の国の種類は 30 を超え母語とする言語の十数種類あり、小中学校の内 5 校の学校に国際教室が設置されている。また、特別支援学級の在籍の子どもは 8% を超えており、特別支援学級のなかにも外国をルーツに持つ子どもたちは多く在籍している。本校には国際文化教育、障害者支援、社会的援助、家庭支援、学習支援等で学校の中で支援の必要な子どもは非常に多い。支援の手が行き届かなく、学校に児童、生徒の居場所がなくなると、子どもは不登校になる。残念ながら不登校の数は神奈川県のトップレベルである。特に本校の不登校出現率は 10% を超えている。子どもだけでなく、景気が悪くなると大人も仕事がなく公的な援助で生活している家庭が増加している。結果、その子どもたちも進学や就労の道を選ぶ事のできない負の連鎖も増えてきている。本校では外国につながる生徒のコミュニケーション能力の育成と学力保障が切実な課題となっている。外国籍、発達、家庭環境と子どもたちの取り巻く環境はかなり多様性に満ちている。そのような過程で研究に至った。

2. 研究の目的

本校の外国にルーツを持つ生徒数は、全校 495 名中 82 名である。外国籍の生徒と一般生徒ではトラブルを毎年何件か経験している。多くは互いにコミュニケーションがとれないことでのいじめや仲間はずれ、不登校また学習言語の理解できないことでの学力不振等が出現する。また、地域の中でも外国をルーツにもつ家庭と日本人の家庭では、見えない壁が少なからず存在する。本校が研究推進する「ダイバーシティ」とは、学校社会の中にみられる様々な差異、具体的には、人種、性別、年齢、障害の有無、性的指向などの面における違いを受け入れ、互いの個性を認め活かしあおうとする考え方や姿勢を促進することで、より良い学校づくり、町づくりができるのではないかと考えている。外国にルーツを持つ子どもを取り巻く課題に重点を置き、以前から本町で進めていたインクルーシブ教育から学校全体に多様性を認め合うダイバーシティ教育に進化継続し、学校のカリキュラムマネジメントの柱にしていく。その手段として、ギガスクール構想からの一人一台端末を活用したICTを使ったコミュニケーションの利便化である。そのことで様々な壁を少しでも取り除き、多様性を認め合える社会へのきっかけとなるのではないかと考えている。また、教室等の環境にも工夫しユニバーサルデザインを取り入れ生徒にも地域にも居心地の良い学校にするため研究と位置付けている。

3. 研究の経過

年度当初の4月の校内研修会で、学校長より学校の方針「だれ一人置き去りしない」宣言
そこで何が出来るか。レインストーミングやワールドカフェ形式等自由な発想を引き出せる
手法で広くアイデアを募集した。

「ダイバーシティ」の定義・目標を共有し、それぞれのアイデアをブラッシュアップし4グループ
に分かれた。(計画では5グループであったが、組織上4グループ構成の方が都合が良いので統
合)

	研究推進部 (校内研推進委員)	異文化理解推進部 (地域、安全グループ)	言語理解推進部 (学習グループ)	校内生活改善 推進部 (活力・支援グループ)
主 な 活 動	①学校全体計画 ②研究発表大会の 運営計画 ③各グループから の発信	①異文化理解促進 ②キャリア教育 ③研究図書の実施 ④地域連携の充実 ・生き方講話・職場体 験・卒業生講話等	①ICTを活用した個別 最適化学習の研究 ②学びのサポート ③学習会の実施 ④ポケトークのレン タル	①校則の見直し ③校舎内環境の充(生徒総会) 異文化生徒の意見を尊重したと 学校の決まりの研究 校則の見直し
4 月		参考文献、図書の充実、		校内環境の調整
5 月	校内研究会全体会 議	JAIC 協力者による 講演会「ダイバーシテ ィ教育」		みんなの体育大会への取り組 み 道徳研究授業 ダイバーシティ通信発行
6 月	校内研究会全体 会議	地域からのボランテ ィアの活用	体育大会 多言語アナウンス	体育大会の反省評価仮想空 間学習環境の研究 校則の改正
7 月	校内研究会全体 会議	本校OBのJAIC協力者 太田さんによる国際 級へのキャリア教育		ダイバーシティ通信発行 メタバースを含むオンライ ン学習
8 月	進路説明会(校内 研)	JAIC 顧問滝坂氏によ る講演会	J. coss 日本 D. L. A の研修会参加	相談指導教室「絆」と連携
9 月	校内研 講演会 卒業生の講話等	生徒のキャリア教育の 充実。		ダイバーシティ通信発行
10 月	「愛川プロジェ クト」連携会議	2学年 JICA 横浜校外 学習キャリア教育	ポケトークレンタ ル開始	国際文化理解調理実習会 みんなの合唱コンへの取り組み (多言語合唱)

11月	JAIQ OBの粟根幸子氏の学習会			
12月	愛川高校とプロジェクト連携	NPO法人「くすのき」と連携	フィリピンとのオンライン教室	ダイバーシティ通信発行
1月	ダイバーシティ校内教育研究発表大会（1/25）			
2月	各部会で反省次年度計画づくり 「愛川プロジェクト推進会議」14日			
3月	次年度の計画 「愛川プロジェクト推進会議」16日			

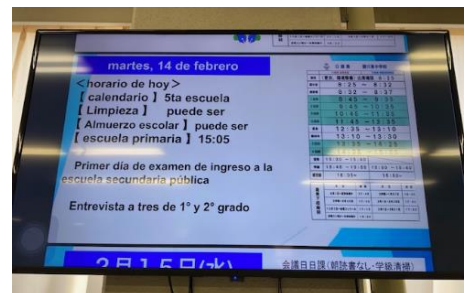
4. 代表的な実践

I 研究推進部（校内研究推進委員会）では次のような活動を行った。

- ①学校全体計画の推進
- ②研究発表大会の運営計画校内発表会
- ③ICT 機材調整 校内環境の改善の実施 各グループと連携 連動
- ④情報発信

学校、地域全体で研究推進することを目標に掲げ、学校ブログや Googlechat 等の電子媒体を主な連絡ツールとして活用し、ペーパーレス化で他の学校業務との差異をつけることで、家庭でも気が付いた時にちょっとした研究をみんなで積み上げることで誰でもできる研究活動としての素心をはかった。

職員室に大型 TV を2台配置し(研究用備品で購入)常に予定や研究の成果が広報できるようにしている。また、日常は外国言語での連絡も提示している。ダイバーシティを常に頭の片隅に置くことで、持続可能な研究になると感じた。



II 異文化理解推進部(地域安全グループが担当)

目標: 地域を巻き込んだダイバーシティ活動授業実践を推進する。また、神奈川県教育委員会、愛川町教育開発センターと連携し、県内先進校の実践者からの指導と助言を仰ぎ、さらなる研究を推進する。助言者として、環境づくりとICT機器の活用でJAIQ横浜のアドバイザー滝坂真一氏及び支援ツール開発のコードタクトの後藤正樹から定期的に助言をもらう。

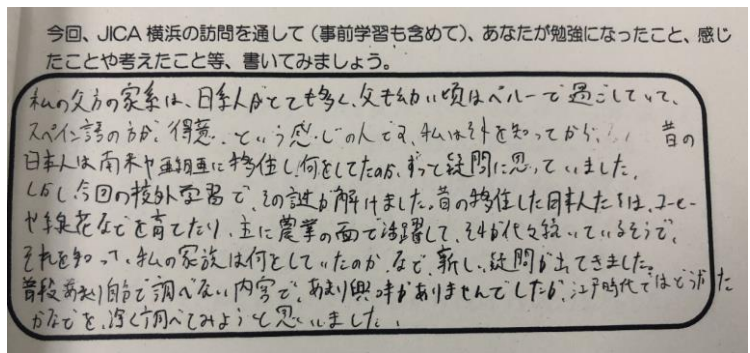


※国際教室の様子

- ①学校生活を通して多文化社会に向けての意識改革や情緒を育む
- ②研修用図書 の 充実
- ③国際教室ステップの充実

JICA の滝坂氏による校内研修を通じて愛川町の外国人のルーツを知ることで、国際理解、異文化理解が深まるのではという提言により、2学年 JICA 横浜のキャリア教育プログラムを受講するために校外学習を計画した。移民移住コーナーの説明を受け、外国につながるのある子どもたちの感想の中には、ある生徒の自分おかれている環境がどうして日本にいるのかわからなかった生徒の感想があった。「わたしの家系は、日系人がとても多く、父も幼いころはペルーで過ごして

いてスペイン語の方が得意です。昔の日本人はなぜ中南米やアジアに移住し、何をしていたのかまた、なぜ日本に戻ってきたのかずっと疑問に思ってきました。今回の校外学習でこの謎が解けました。昔の移住した日本人たちは、コーヒーや綿花の栽培等の農業で活躍しそれが代々続いていたのだとわかりました。それを知って私の家族は何をしていたのか疑問になり調べてみたくなりました。～後略」今回のキャリア教育で生徒たちの自分の住んでいる町の環境がわかり異文化理解につながったような気がする



Ⅲ 言語理解推進部く生徒への日本語支援>学習グループ担当

①ICT を活用した個別最適化学習の研究

ベネッセ、ミライシードのドリルパーク

日本語教育コンテンツ共有システムを活用研究

個々の国際教室在籍の生徒への言語支援を iPad で翻訳ソフトや漢字練習ソフトを活用する。アプリケーション活用研修を行う。

②学びのサポート

なるべく母語による授業の展開、英語を母語にしたフィリピン系には英語教員で行うようにしている。Ipad(助成金で購入ギガ端末は chromebook で携帯性に欠けるため)を活用した Google 翻訳の活用、ポケットクより多くの情報量を翻訳することができるため、場面によっては ipad を使用する。

③学習会の実施

NPO 法人クスノキの職員や近隣の小学校の教員とオンライン学習会の実施。中学校の教員のスキルではできなかった。国語(日本語教育について学ぶことができた)また、日本語スキルのための J. coss や日本 D. L. A の研修会参加した。

④ポケトークの校内レンタル

助成金で購入したカメラ付きのポケトークは、大変優れモノで道徳の授業などで子どもにレンタルすることで、教科書の単語をカメラで写し、翻訳することで自ら学ぶことができた。

IV 校内生活改善 推進部（活力・支援グループ）

①居場所としてのリソースルーム設立、

入国してきて間もない生徒や集団活動に苦手感がある生徒は居心地を重視したリソースルームを活用している。使用は規定はなく自由に使ってよい場所として開放している。



②メタバースを使ったコミュニケーション



タイから来日した4名が不登校になり愛川町の適応指導教室「絆」に入級している。その生徒たちとオンライン上のやりとりをし、学校とのつながりを保っている。また、修学旅行先の京都はメタバースによる観光が盛んなため、VR(助成金で購入)上で京都の疑似体験をすることができた。

③ユニバーサルデザインに基づいた校則の改正

入国してきた生徒は制服の入手が難しい、特に3年生の途中で入国した家庭に一式10万円ぐらいする用品をそろえてもらうことは困難である。以前はバザー等で安価に販売できていたが、家庭数も減少し、現在ではそれも難しくなっている。愛川町の中学校では、校内ではジャージで過ごすため、制服が必要な時は儀式と登下校のみである。

制服がそろわない生徒のことや登下校のみ着用する必要性を考え生徒会ではジャージの登下校の許可を学校に求めてきた。生徒総会でも職員会議でも可決し6月からジャージ登校の許可が出た、制服でもジャージでも選べる。今までのみんなと一緒にそれが学校的な文化に一石を投じた。

この取り組みは後日タウン誌から全国ネットの民放からも取材が来て、記事になり、テレビで放映された。



5. 研究の成果

1年の総括として、研究の成果を評価し分析した。具体的には、生徒アンケート・教員アンケートの推移、保護者地域へのアンケート等の分析を行い、研究に活かした。次年度は持続可能(サステイナブル)になっているかの分析も行う。その結果、生徒の意識と教職員の多様性理解に関しての結果は、5ポイントアップでまずまずの評価を得たが、地域への広報が足りなかったため、地域では「知らなかった」「特に意識をしていない」等のご意見ももらった。さらに多国籍の言語でのアンケートを取らなかったため、外国籍の保護者の回答が少なかった。この点については、次年度に生かしたい。

6. 今後の課題・展望

来年度への展望として、学校のスローガンでもある「誰一人置きざりにしない学校」へ多様性理解をベースにICTを活用しながら迫っていきたい。特に仮想空間、VRを使った教育支援に可能性を感じている。

7. おわりに

本研究では目標に対して手段が種々ありいわゆる「とっ散らかった」形になってしまった。異文化の生徒や希少な価値観を持つ生徒、ハンディキャップがある子どもたちにも対応できる学校を目指すために、研究を継続させていこうと思っている。

「すべての子どもたちに対応している学校」をめざす。そのための手段としてICT 端末やデジタル機器を活用した職業は新たな可能性を秘めていると感じている。

8. 参考文献

- ・メタバースとは何か ネット上の「もう一つの世界」著 岡嶋 裕史
- ・差別のない社会をつくるインクルーシブ教育 誰のことばにも同じだけ価値がある